

白井こころ（しらいこころ）

2006年大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学（公衆衛生学）講座にて医学博士取得。大阪大学大学院医学系研究科研究員，人間科学研究科特任助教を経て，2009年より琉球大学法文学部准教授（現職）。現在、大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学講座の招聘教員，ハーバード大学公衆衛生大学院(Society, Human development and health, HSPH)研究員を併任。

現在・これまでの主たる研究・仕事の内容

専門分野：公衆衛生学・社会疫学・老年学

社会と健康の関係に興味を持ち、高齢者の生きがい感や Subjective Well-being の研究を中心として、ポジティブ感情や SOC(ストレス対処能力)など、心理的な意識や感情が健康に与える影響について研究を行ってきた。ブータン王国の要請により GNH (Gross national happiness) 調査にも参画。現在は、特に個人の感情や幸福感に影響する、ソーシャル・サポートやソーシャル・キャピタルなど、周囲の人間との関係性や、地域のつながりが個人や地域の健康に及ぼす影響について興味を持ち、「健康の社会的決定要因」の視点から調査・研究を行っている。沖縄では、南城市や今帰仁村での健康調査とともに、地域のつながりを軸にした、特定健診率向上のための取り組みや、食事介入を通じた健康づくりに取り組んでいる。

報告要旨

沖縄県は健康長寿の島として知られ、おじい、おばあのイメージと共に、地域の高齢者が元気であることが特徴とされてきた。しかし一方で 2000 年の "26 ショック"（男性の平均寿命の 4 位→26 位へ転落）以降、沖縄の中老年世代、特に男性の健康状態の悪化は著しく、肥満率など、生活習慣病関連指標でも、不健康先進県となりつつある。すなわち沖縄は、高齢者世代の健康長寿維持のポジティブな面と中高年者の生活習慣病指標の悪化のネガティブな面の両面で、トップランナーとなっている。ここには、沖縄のおかれた歴史的・社会的状況や、地域の人と人とのつながり等、社会環境の変遷が大きく関係していると考えられる。

沖縄には、人・社会のありようと健康の関連を考えるうえで、学ぶべき超高齢者の健康長寿の秘訣と、理解して予防すべき中高年層の健康リスクの両方が特徴的に存在すると考えられる。社会階層性理論 (Evans RG, 1994) では、集団の健康度や平均寿命は、社会経済的水準によってある程度決定されると仮説するが、日本国内で所得水準が低く、失業率が高い沖縄において、高い平均寿命が達成されていたことは、この仮説に矛盾する。Cockerham WC (2001) らは沖縄を社会階層性理論の例外として論じたが、中高齢者についてはこの仮説が当てはまる現状がある。一方で、現在の高齢者の健康長寿については、もしも沖縄社会に格差が可視化されにくい環境や、社会経済的不利益の健康への悪影響を緩衝する別の要因があったと考えれば、例えば地域の絆や共同体の持つソーシャル・キャピタルが関係したとは考えられないだろうか？

本報告では、ソーシャル・キャピタルと健康についての国内外の研究結果を軸に、JAGES（日本老年学的評価）研究の一員として、沖縄で行った 2010-2012 年の調査 (OKINAWA-AGES) からの知見や、地元での健康増進の取り組みについて報告させていただく。沖縄の地域共同体が持つ、地域の力や絆と健康の関係を調査結果より考察し、地域の健康資源をポピュレーション・アプローチに活用する可能性についても考える。沖縄の状況を通して「人・社会のありようと健康」について、皆さんと一緒に考えさせて戴きたい。